

麦類赤かび病の防除対策について

赤かび病菌は人体に有害なかび毒を産生するため、赤かび病被害粒が0.05%以上混入した麦は販売することができません。このため、予防的な防除を行い、発生防止に努めることが重要です。麦の生育ステージに合わせて確実に適期防除を行いましょう。

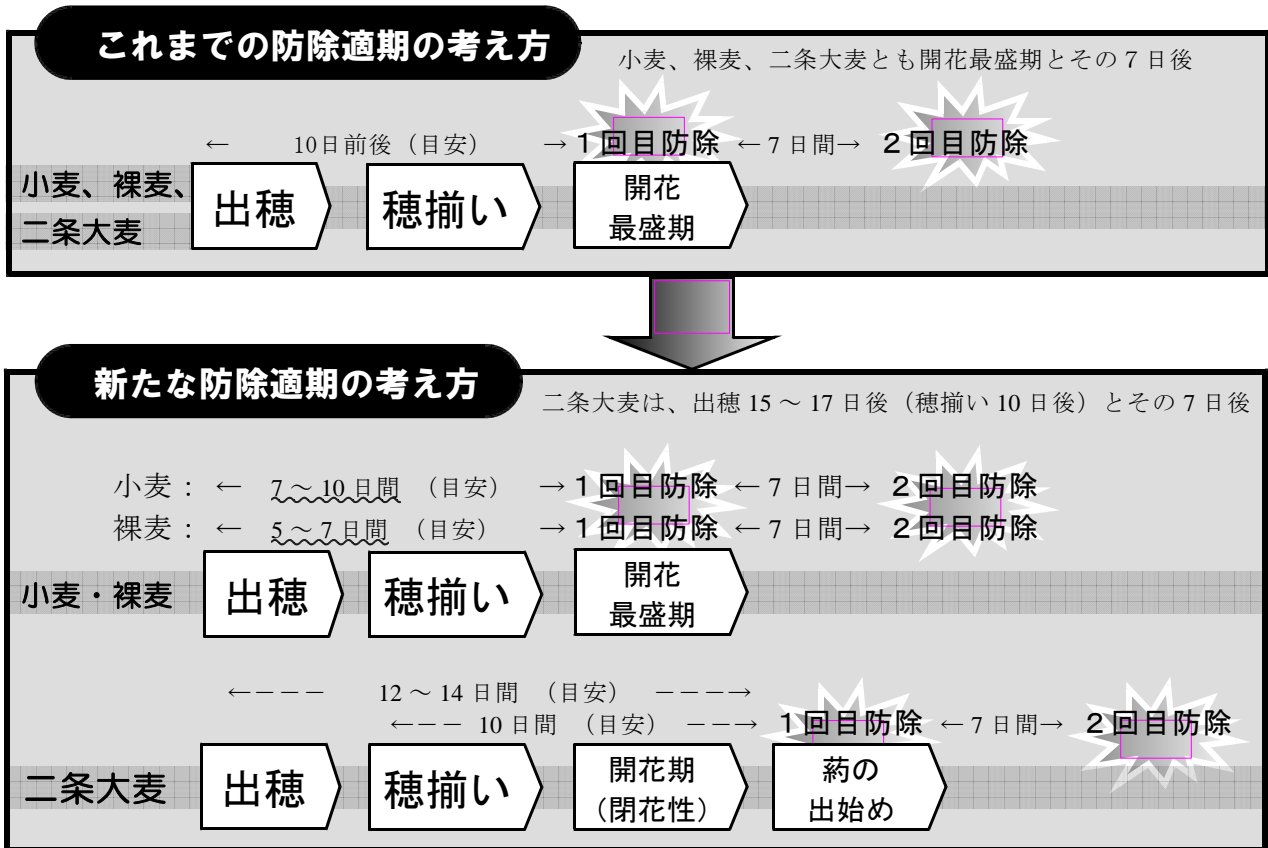
二条大麦は防除適期の考え方が変わりました。開花期ではなく、葯が出始める時期を基準としてください。

葯の出始めは、出穂12~14日後、穂揃い期10日後が目安です。

また、小麦と裸麦の「出穂から開花最盛期（防除適期）」の目安が変わりましたので、参考にしてください。



二条大麦の開花期 葯の抽出期
(九州・沖縄農研センター原図)



なお、生育は播種日や品種、今後の気温の変動等により圃場によって大きく異なるので、圃場の見回りをを行い、生育状況や病虫害の発生状況の把握に努めましょう。

<防除対策及び留意点>

- (1) 小麦と裸麦では開花最盛期から10日間程度の間が最も感染しやすく、二条大麦では蒴が出始める時期に感染しやすいため、この間に降雨が続く気温が高いと多発しやすくなります。
- (2) 小麦と裸麦では、開花最盛期とその7～10日後の2回散布を基本とします。開花最盛期の目安は、小麦は出穂7～10日後、裸麦は出穂5～7日後です。
二条大麦では蒴の出始めとその7日後の2回散布を基本とします。蒴の出始めの目安は、出穂12～14日後（穂揃い期10日後）です。
- (3) 防除適期の期間が短いので、雨が降り続く場合は合間を見て散布しましょう。
水和剤、乳剤の場合は、散布後薬液が乾けば、その後降雨があっても防除効果の低下は少なくなります。粉剤では、散布後5～6時間以内に降雨があると防除効果が低下しやすくなります。一般に水和剤、乳剤の方が粉剤よりも防除効果が高くなります。
- (4) 水田農業研究所による麦類の品種ごとの平年出穂期及び予想出穂期は下表に示すとおりです。本年の出穂期はほぼ平年並と予測されていますが、播種日や4月以降の気温によっては出穂期が変動することも予想されますので、圃場の見回りをを行い、防除適期を失ないように計画的に防除を行いましょう。

平年出穂期及び本年予想出穂期（宇佐市11月20日播種）

品 種	麦種	平年出穂期	本年予想出穂期	平年登熟期間
イチバンボシ	裸麦	4月6日	4月6日	出穂から45日
ニシノホシ	二条大麦	4月8日	4月6日	出穂から42日
チクゴイズミ	小麦	4月13日	4月13日	出穂から49日
農林61号	小麦	4月18日	4月19日	出穂から47日

平成20年3月24日現在

- (5) 防除薬剤は、大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針を参照してください。
(ホームページアドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/oita/>)
主要薬剤の麦種ごとの登録は以下のとおりです。収穫前日数に十分注意してください。

【散布】

作物名	農薬の名称	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の使用回数
小麦	トップジンMゾル トップジンM水和剤	1000～1500倍	-	収穫14日前まで	3回以内 (出穂期以降は2回以内)
	シルバキュアフロアブル	2000倍	60～150L/10a	収穫14日前まで	2回以内
	チルト乳剤25	1000～2000倍	60～150L/10a	収穫3日前まで	3回以内
麦類 (小麦を除く)	トップジンM水和剤	1000～1500倍	-	収穫30日前まで	3回以内 (出穂期以降は1回以内)
大麦	チルト乳剤25	1000～2000倍	60～150L/10a	収穫21日前まで	1回

【無人ヘリコプターによる散布】

作物名	農薬の名称	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の使用回数
小麦	トップジンMゾル	8倍	0.8L/10a	収穫14日前まで	3回以内 (出穂期以降は2回以内)
	シルバキュアフロアブル	16倍	0.8L/10a	収穫14日前まで	2回以内
	チルト乳剤25	8倍	800ml/10a	収穫7日前まで	3回以内
麦類 (小麦を除く)	トップジンMゾル	4倍	0.8L/10a	収穫30日前まで	3回以内 (出穂期以降は1回以内)
大麦	チルト乳剤25	8倍	800ml/10a	収穫21日前まで	1回